

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学級・授業づくり —特別支援教育コーディネーターの立場で進める校内体制づくり—

木村 杏子(平成 29 年度教育実践コース修了)

I 問題と目的

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」(文部科学省、2012)では、特別支援教育の理念の具体化とその推進が求められ、「合理的配慮」や「基礎的環境整備」の必要性が示された。今後のインクルーシブ教育システムを校内で推進していくためには、これまでの個への支援のみに視点を置いた自身の特別支援教育コーディネーターとして在り方を見直し、「資質・能力」をさらに向上させねばならないと考えた。

「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な配慮を必要とする児童生徒に関する調査」(文部科学省、2012)によれば、校内委員会で特別な教育的支援が必要と判断されている児童生徒は18.4%、このうち、授業時間内に教室で個別の配慮・支援が行われていない児童生徒が49.9%いることが明らかになった。在籍校でも、子どもが全員授業に参加し、「分かる・できる」を実感しているとは言い難い状況があり、支援が遅れば2次的な問題に発展する可能性もある。その予防として注目されているのが、ユニバーサルデザイン(以下UD)の考え方の教育への活用であり、国内でも多様な実践とその効果が報告されている(山元、2016)。石塚・京極・廣瀬(2014)は、学校の体制作りとしてUDの実践に取り組むことが重要であると指摘している。学校組織全体でUDの視点を取り入れた学級・授業づくりを推進していくことが求められている。特別支援教育コーディネーターとして、これに取り組んでいく必要がある。

そこで、在籍校の教員の授業改善に対する意識の向上と、子どもの授業参加度の変容を目指し、UDの視点を取り入れた学級・授業づくりを学校組織全体で取り組んでいくためには、どのような手法が効果的なのかを検討することを研究の目的とする。ま

た、それを支える特別支援教育コーディネーターの在り方についても検討していく。

II 取組の実際

1 自校のUDチェックリストの作成

全職員の授業を参観し、校内で優れた指導が多数実践されていることが分かった。しかし、優れた指導のほとんどは無意識に行われており、それを学ぶ時間と機会がない。そこで、それぞれの実践の優れた内容をまとめ、「学びを深める種」と題した便りを定期的に校内で発行し紹介した。またその中から、子どもが授業に参加するために必要であると思われる優れた指導技術を選出し、「学級づくり」と「授業づくり」の2つの視点で整理した。そして山形県教育センター(2013)や逗子市教育委員会(2015)が示しているチェックリストを参考に、7カテゴリー40項目のチェックリストを提案した。その後、校内研修1において全職員で文言や項目数について検討し、8カテゴリー30項目に精選し、自校のチェックリストを作成した。

2 研究推進部と連携した校内研修の実施

UDの視点を取り入れた学級・授業づくりを学校体制で取り組み、なおかつ職員に多忙感をもたせない校内研修が必要である。そのために、研究推進部と連携し、現在あるシステムを活用しながら組織的・計画的に研修内容を検討した。研究推進部の一員として、特別支援教育コーディネーターの視点から取り組んだ工夫は以下の6点である。

(1) 共有を図るための校内研修1

研究主任と共にチェックリストに基づいたモデル授業を構想し、研究主任が実践した授業を撮影した。そして校内研修1において全職員でチェックリストと照らし合わせて視聴した。各教員が見付けた指導技術を付箋に記録し、それを全体で共有するこ

とでチェックリストの各項目のイメージの共有化を図った。

(2) UDチェックリストでの自己評価

校内研修の取組の1つとしてチェックリストを用いた自己評価を年3回導入した。振り返りが短時間で簡単にできるよう、エクセルで入力できるシートを作成し、結果をレーダーチャートで視覚的に確認できるようにした。

(3) 共通認識を図るための校内研修2

校内研究のテーマは「対話を通して協働して課題解決をする子ども」となった。対話や協働を促すためには、課題を焦点化する、見通しをもたせる、子どもの言葉をつなぐための教師のコーディネート力、教材教具の工夫などがあげられる。これは、UDチェックリストの項目と重なる。UDチェックリストを活用して自分の実践を振り返ることが校内研究のテーマ実現に有効であることを全職員で共有した。

(4) 授業評価シートの作成

30項目のチェックリストの中から、校内研究のテーマと特にかかわりの深い7項目を選び、校内で公開授業をする際の視点とした。授業者はその7項目から授業の中で特に意識したい内容を1つ選んで項目を指導案に表記し、参観者は授業評価シートでその内容についての評価を行った。この実施方法は校内研修2で共有した。

(5) 抽出学級での検証

教師の指導行動が変化することが、子どもの授業の参加に影響があるのかを検証するため、3人の20～30代の若手教諭(A・B・C)の算数の授業を定期的にビデオ撮影した。また、それぞれの学級から子ども一人を抽出し、その授業参加の様子をもう1台のビデオカメラで撮影した。発達障がい診断はないが、筆者が特別な支援を要すると考えている子どもである。どの子どもを抽出し撮影しているかは担任には知らせなかった。

(6) 成果と課題を共有する校内研修3

抽出学級の授業ビデオを全職員で視聴し、チェックリストを基に良い点と改善点をグループで話し合い共有した。また、子どもの言葉をつなぐための具体的な14の発話例を示し、全員で唱えた。最後にこれまでの取組の成果と課題を示し、「私のワンアクション」として各自が自分の授業改善のポイントを記入した。

Ⅲ 取組の結果

1 UDチェックリスト

6、9、11月末に全職員で自己評価を行った。取組終了後、職員にアンケートを行った(以下事後アンケート)。「チェックリストでの振り返りは学級・授業づくりの改善に有効だったか」という設問では、31%が有効だった、69%が少し有効だったと回答した。主な理由として、「肯定的な言葉掛けに気を付けるようになった。」「自分の足りないところに気付けた。」「忙しくて日々流れていくのでこの取組は必要。」などが挙げられた。また、チェックリストで自己評価をすることへの抵抗感については、75%がなかった、もしくはあまりなかったと回答し、25%が少しあったと回答した。

2 UDの視点と授業評価シート

全ての職員が2回の授業研究において、「今日のUDの視点」を指導案に表記し授業を行った。事後アンケートの「項目を選んで授業をすることは、自分の授業改善に有効だったか」の設問では、62%が有効だった、38%が少し有効だったと回答した。

参観後の授業評価シートは、使用開始直後の記述内容は少なかったが、次第に教師の発話内容などを具体的に捉え、記入されるようになった。授業者が示した番号以外の項目についても記述されることが増えた。「子どもの反応をよく見取る中で、教師自身も表情が豊かになった。」「校内研修で学んだことを生かして、子どものつばやきに反応していた。」など授業者の変化を捉え、その指導の効果を認める記述が多数されていた。授業後の協議会でもUDの視点が話題にされることが多かった。校内全体で授業者への肯定的なフィードバックが増えていった。

3 抽出学級での検証

1回目(6月)の授業終了後、抽出学級の3教諭(A、B、C)と筆者とでビデオを見ながら、授業の様子を振り返った。「教材研究が不十分で課題やまとめを悩んでいた。」「その時間は、子どもをよく見ていなかった。」「子どもが理解しているかどうかの確認を忘れてたり、反応を見逃したりした。」「一人の発言で全員が分かったことのように進んでしまっていた。」などに気付いた。その後、各々でこの改善に取り組むことになった。A教諭は、「子どもをよく見ていなかった。」と振り返った。そこで、

授業中どこに視線を向けていたかをA教諭の授業記録ビデオで20秒ごとに確認し、振り返りの材料とした(図1)。

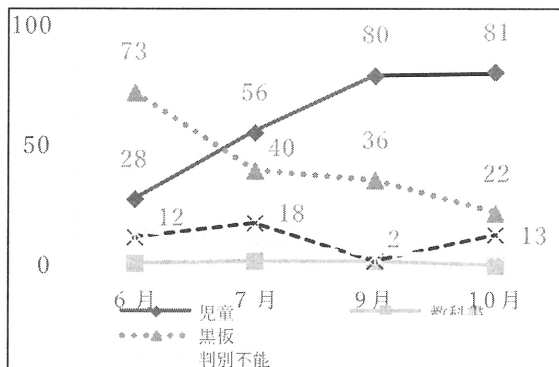


図1 A教諭の視線の配分割合

その結果、7月以降は黒板よりも子どもに視線を向けて授業をすることができるようになってきた。

また、授業における子どもの言動をカテゴリー化し、抽出児を撮影したビデオを20秒ごとに静止してその様子をカウントした。それぞれの学級の抽出児の参加率は図2の通りになった。

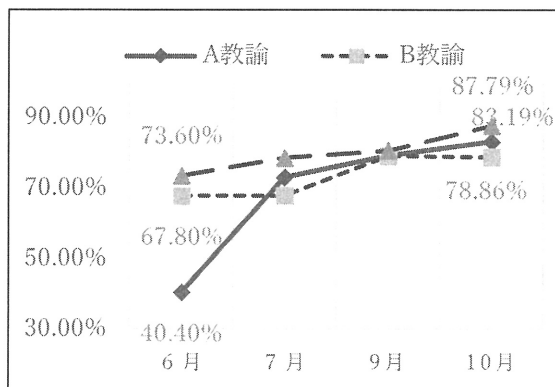


図2 抽出児童の授業参加率の変化

4 校内研修

校内研修は研究推進部と共にPDCAサイクルを意識し3回行った。1回目は課題の共有、2回目は内容・方法の共通認識、3回目は成果と課題の共有を目的とした。事後アンケートの「校内研修の内容は自分の学級づくりや授業づくりに有効だったか」という設問では、78%が有効だった、22%が少し有効だった回答した。主な理由として、「子ども一人一人をしっかり見るように心掛けるようになった。」「授業を見ることで自分の改善点や具体的な方法が分かった。」などが述べられた。

5 新潟市生活・学習状況調査の結果

図3、4は、児童を対象とする新潟市生活・学習

状況調査の結果のうち、本実践研究の内容と関連する項目について、「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した数の割合を示したものである。

授業、学級ともに関連する数値が前年度に比べて明らかに上昇している。このことから、授業中における話し合い活動が前年度より活発化していること、学級内において互いを認め合ったり、助け合ったりしていることが分かる。

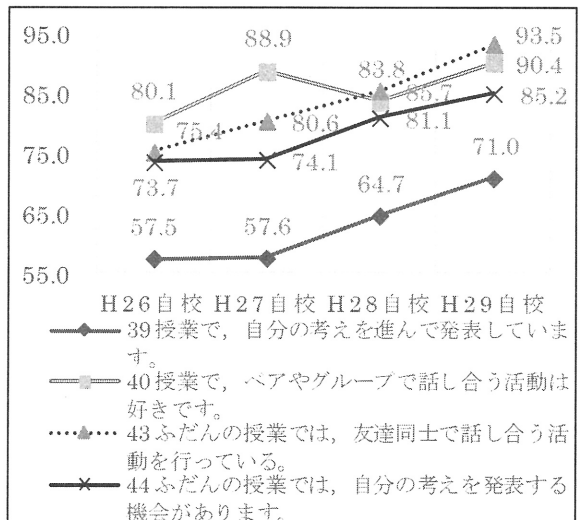


図3 在籍校の生活・学習意識調査の結果(授業)

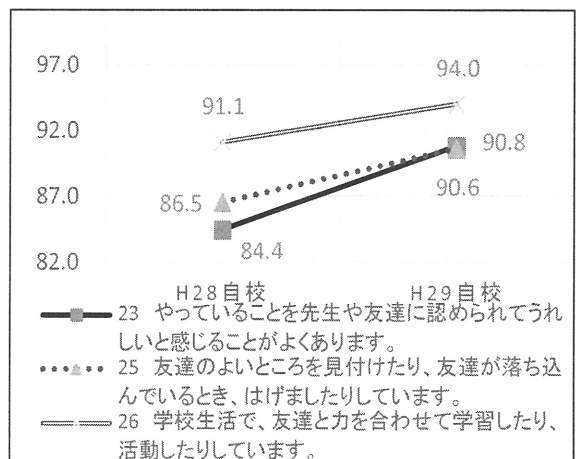


図4 在籍校の生活・学習意識調査の結果(学級)

IV 成果と課題

1 成果

事後アンケートでは、チェックリストによる振り返りや校内研修の内容が自分の学級づくりや授業づくりに有効であり、授業研究に授業評価シートを活用したことが授業改善に有効であったと全員が回答した。また、ビデオ記録での振り返りを行った3学級の教師の指導行動が変わり、子どもの参加率が上昇した。さらに、児童による新潟市生活・学習

状況調査での今回の取組に関連する数値が前年度に比べて上昇した。これらの内容は授業評価シートとして取り上げた内容に関連している。子どもにこのような変化を生んだのは、全職員で授業のねらいや課題、既習事項の活用、解決の見通し、かかわり合い、肯定的評価、教材・教具の工夫などに校内研修として取り組んできた成果である。

自校のチェックリストの作成と、特別支援教育コーディネーターとして研究推進部と共同で取り組んできた6つの取組が、効果を上げたと考える。

事後アンケートで、「今後も学校体制で継続させていくために必要なこと」を職員に聞いた。校内研修とチェックリストとの関連を指摘した人が52人、特別支援教育コーディネーターや研究主任などのリーダーシップが23人、チェックリストの作成が18人、職員のチーム力が9人であった。このことから、複数の要因が関連して、今回の取組が成果を上げたと言える。中でも、チェックリストと校内研修を結び付けて活用したこと、これを立案し実行していく過程で、研究主任と特別支援教育コーディネーターが協働して研修を進めてきたことが効果を上げた。また、この過程を通じて職員のチーム力が向上したと言えるだろう。

2 課題

チェックリストでの評価に抵抗感を感じている職員が25%いた。抵抗感があると答えた職員は50歳以上であり、多忙が主な理由であった。有効性は感じながらも必要感をもたせるまでに至らなかった。長年培ってきた授業スタイルを見直すことに対する抵抗感があるのかもしれない。チェックリストで振り返ることが、授業改善に有効であることを今後も示していく必要がある。また、チェックリストによる評価の形骸化も考えられる。子どもや教師の実態に合わせて常に最新の状態に保ったり、振り返りによるメタ認知向上の効果を伝えたりして、その予防を図る必要がある。

この取組を今後も継続していくためには職員の異動、多忙化の問題などの課題がある。課題を克服するための取組について、これからも検証を重ねていきたい。

V 特別支援教育コーディネーターとして

今回の実践研究を通し、「授業を見ること」は特別支援教育における「価値に気付くこと」に変化した。職員の良さを見付け、その技術を言語化し、肯定的なフィードバックをすることを大切にするようになった。価値を共有することが、職員と職員とを結び付け関係性を深めること、そして学校全体をチームへとつなぐことができることを実感した。また、目標達成のためのプロセスでは、多様な視点から意見を出し合い協働していくこと、進捗状況や成果と課題を職員で共有する場が重要であること、自校に合った形で校内研修を進めていく必要性を感じた。これらの視点を得たことは、特別支援教育コーディネーターとして、大きな経験と自信となった。今後もこの視点は生かしていくべきであり、伝えていかなければならないと考える。

学校組織全体で特別支援教育を推進していくには、特別支援教育コーディネーターは特別支援教育に関して高い専門性をもち、知見を示すことはもちろん、校内組織との連携、取組の価値づけなど多様なコーディネート力も同時に求められる。更なる自覚をもち、理論と実践を積み重ねていかななくてはならない。またこれまで以上に多様な人とつながる、つなげるためのコーディネート力を磨いていくことが必要である。これからも学び続ける教師でありたい。

【参考文献】

- 石塚謙二・京極澄子・慶瀬由美子(2014):自治体の明確な方針と支援姿勢の上で授業を中核に据えて研究を深めていく、総合教育技術、34-37
- 逗子市教育委員会(2015):授業・学級経営についての自己チェックリスト
- 文部科学省中央教育審議会(2012):共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進(報告)
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2012):通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査
- 山形県教育委員会(2013):ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり.研究報告書第80号
- 山元薫(2016):特別支援教育における授業のユニバーサルデザイン化の意義、静岡大学教育学部研究報告.教科教育学篇.47、66-76